捕燈漫筆

特別
14
1919
208

176485

擬題漫筆

○年賀状に五峰の歌を再改竄せしは
別紙を誠之に、立憲を開敬公年賀の
歌を少々訂正し十数篇を出し示さ
れたるの中より抜き左の二篇を左に出
思ふに

甲辰三月紀事

天語琅琅賜勅明、群黎誰不詔忠誠、軍
資六億立法決、敵國君臣眠夢驚、渤海波
濤如陸地、韓山草木老神兵、皇猷克造

38- 9007

千古衆志成一巨城

寄懐須藤難川兼呈岡崎将軍

金戈鉄馬走沙場投筆知君意氣昂、郭伍提携如一體、旅團偃突盡同郷、花譙月上蘆笛壯大漢雲開丁陣長、不識麾公風勢壮、旧軍横槊満沙場、

○後ろ書きを以て新堤の紀念碑を作ることとなり、大堤の形を二十数の碑を紀念碑後ろ書きの形にて受け取り一冊のアルバムに郭寧に収めたるうるに致候

寒蓋開城ならば三十名ばかりなれども、その数の多きに驚かるるものなれば、ともかく別紙に記すべきを言葉に尽くし難き程なれども、二十数名ばかりに記すべきを思ひ、記すべきを無味の点にて廿人を選ぶ、即ち左の通り、後ろ書きを選きと定め、即ち寄せ書きにて人々の氏名と簡単の話三四を添ちん

杉山金吉（三郎）　横井作太　村上忠勝
吉田吉五郎　大隈信常　赤堀文吉
菊池三九郎（晩香）　高田早苗（半峯）　坂仁右衛門（十峯）
岡田朝太郎（一戸心）　梁来流郎（李郎）　本田幸三郎（秋水）

田原藩（柳陰）　藤澤和吉郎　坪内雄蔵
本田仁教　江部清夫　石川林章
幸田歩月（度仁）　小倉鎮之助　叢谷秀雄
坪谷善四郎　松平政大若　佐々木信雄
内藤竹雪　寺田彬清　仁科
○よく辛うしてよくこそ行きしあはれなるこころの心をあらんとおもふ　竹雪
○朝鮮の降伏を初めの下さ
○居蘇不知　沈年初春毒兵満傳を喜舞去歌
忽傳従旅順以書　三郎
○二龍先死一枚僵　旅順開城白旗揚　掃得秋
冬青殺氣山河草木動老光　晩香
○もろもろの出世界の海を離けて　[illegible]

○旅順城終陥武威振満邦　上有明天子寛恩不殺降
○天険難攻陥況加人工極皇軍更精鋭能奪鬼神力艦艦壓海荒艇燃追敵潮敵艦先震慄黄海垂龍跳攻圍六閲月潮刃戮黄血一墨又一墨攻防何惨烈弔霊山陥敵艦滅此一矢事
去年二月朝之枚元寇提報達天聞敵帥降今旅順陥天険人工帰皇軍優況加敵帥敵帥注
聖恩史上稀長此武威満朝暾　[illegible]
北の森深紀ヶ原二〇三高地ひとつ残りし木木
古城の雪霊山高々剣川の旅順市中と自分
を指す　[illegible]　山と呼ばるると　明治

[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

[illegible]

の[illegible]に[illegible]波う示し[illegible]仕[illegible]事[illegible]

[illegible]

八

富士政め

[illegible]

王の[illegible]

[illegible]

ふじの[illegible]

[illegible]

[illegible]

蒸し出汁を吉へと昔んだ、えんと

胡甲焼

海りとを

初日の下と

俳画を蒸好つ三味線を抱て立つて

弾たあと、とんと小波う鼓をしたこんと

胡甲云々の絵そうきと書アルバムの内

俳画である

此の蒸上小波ととえ蒸、等野分影を配

つた絵そうきを好んで、即ち一枚をアルバ

ムの表紙とこうして、此の絵

もうきとある魚の自筆ひあ

うう山人をえんと次つて不ととて絵こ

ころうがあつて拙を思ふ小浅の方まこ

ルを山人の載山中の花も上出来だと云あ

ことである

原拙を

蒸焼

おぬいうそ

おしをと

表紙しを

帽とうと

とそうと

ふ

明治卅七年十二月十六日紅葉祭第二回記念俳葉書（五百枚限印刷）東京大江石印

○世人を先天的と推定する事の義理を知らしてゐる、近い例を取れば言い葉を軟へて攻路と銀ちてゐるようなものもあるが、これは元来の問題なる後しろうこんを不思議と助けて来る、こんを誰れも元とおもふ事に成る、支那人とても此作法は既に一定の規則の説をなすべき一定しにくいものである、自分の考へでは支那の学生を率ゐて数年中驛あるいは一年を好しとせるこの作法のおもふ人も伝を元ちくぶ、例へば出来る支那学生の今く這入んを云つたのが、どうしても這入らぬ

そこで作法をコヤツめるを定生を学ると思ふてもらたが、あとは知らぬ支那の四書を支那語の四書を学ぶ、支人のそのうちに日本語を学ぶ人の方が重ひを云い支那語を訳する場合を考へ残らう事を出すのが例として出来る迄に学ぶを銭うちの方法のあるうと、こんを少元を作法も長ぬうちに一番を興しにくいである

○車の後推のこと

こんを推家法で生前日本人を伝事があるとし困ることろふ例を学ぶ中に事一言であるこの四二寸用もうと思ふこと書きつけて置くこと

[illegible]の[illegible]と日本の車夫と自分の力の[illegible]
[illegible]を車一すつけることを敢て辞さない
[illegible]こんといいうも[illegible]思議である、……九鬼侯や
其他の侯[illegible]、つてを利用して自分
一人の力に拠きかんない[illegible]を多く積む
[illegible]馬鹿な話しでもないが
……自己の力[illegible]
きる[illegible]の[illegible]而
[illegible]べきである、又[illegible]而
[illegible]を減じて[illegible]
謂もないである、[illegible]
る積もりとの[illegible]
の[illegible]こうして[illegible]

[illegible]ん[illegible]
[illegible]
初めて[illegible]毎年[illegible]
[illegible]きを辞さんの[illegible]
車夫の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の話をザットこんな[illegible]、車夫[illegible]
く[illegible]を積んで[illegible]
[illegible]日本の[illegible]
[illegible]べきである[illegible]
[illegible]

[illegible]

○松平筑前守殿天保二年[illegible]
生[illegible]ことを[illegible]
[illegible]文政二年[illegible]
の[illegible]
出来[illegible]
賄賂[illegible]
[illegible]
賄賂[illegible]
長[illegible]一年賄賂の収入[illegible]
[illegible]
賂の[illegible]

城山校

来[illegible]
[illegible]
因[illegible]賄[illegible]
[illegible]
○[illegible]
[illegible]大[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

第三番ありいと云ふ一同供宴し
○宮中儀式の上の大系を記し一ツおうい
ぶうあるこれを今の事いうあり毎年
外国使う宮中八月朔日第三番
式者の外国使うの他を率ゐて謁見するのあ
るの宮中の式としてそが踏りしに陛下
謁見し終りて使の次の新設なる宮
使一同の退くと陛下宮中を退い
て後ち、使一同の拝手を物ふ、こんう宮中
の模倣ひなるこれ…ある年新発使
う為第三番の者を率ゐ儀式の通
せくる某国使うの新発使の後日を代記する

こゝをうとに、右の通り此の度初めの巻おな
じかの条の前年のことをスッカリ忘れ
して謁見を為したるなるを
んを誤まりて、陛下しうるに玉座ハツシ
直ち行き、日右手を延ばして拝手を求めた
の式部官大いに驚き後ろに此の男を
ひき戻し、厳重懲戒を維新したことがあ
つたそうな
○旗幟沿革を日ふ有るの話柄とそうそた

○ステウドう海軍一に Japan by the Japanese

うた未拙訳ながら為るを得ざるも million of leaves
と言ふことなるべしアセニヤムと云ふ雑誌なんか批評するに
も最適切と思はれ未だヤツキリとしたことを言
ふべけれども、ツマリ「アセニヤム」の評者の方が未拙
なるも眼識も全く一歩高いことを認めざるを得ず
第三の方法は之を一言にして云へば外人に対する誹謗を少くする
為め印度外人のみなるヤツ附けるを
而して此の第三のことは、今度の評
論は之を簡略な物語
此問題は第三番目の和漢の美

論ずるを、アセニヤム評者の批評も未拙人の意味
もモット厚いのであるが、アセニヤム評者の未拙
人の第三番目の集を評して million leaves とし
たるを何となく悪評をやと全買一枚ぶ云ふ意
未拙人の面白がるを解つたるが如く即ち之を意
味する間違とまつたのである此為の間違
を公平に比較したるを未拙人のを所説を
を出すに比較一較もしたる意味の居説著しく
且其報告の態度に関係ある、之を及
しアセニヤム評者の方を論評し得
態度を以て語ることを未拙人を論ずやうに
ある所を博引旁投信ずるを為るの解

稗ヶ二流あるを流き去れるの云くるを其中の一
説なるも寧ろ前者を以て前四つの例代
と解せる七義りの説を異にするものなるを
の意語解釈深きものあるを後者 陸氏義
の解釈の如きも例くは集の言を去れる
ハ唯此コレリシコンと稱きたるも アセニヤム
訳者を学ぶ者コレクトーを得ずして精細
の研究進捗し秩序的の編年なる意
味を解くべき論見の如き見るべきもの
あり 此訳者を何人なりやとも動の如
き深意遂るに日本文学研究者を以四人中な
せしなるを我うるの者論ひある

意を集めて後の西洋の意味に何あるう
ヤ……アセニヤム訳者の Lurner of Innumerry
Language と去れる人の Brilliantness 後
者の傳者の説きあるを出ずるを何人も異
説なるべし 又アセニヤム訳者の如き
Intellectual Jabbers は其意味をもつて
ゐるものなるの外人中なるの又なる意 ぶること
ニヤム訳者は陸氏義 意味なる説明なる、アセ
義をよく説明するを見ると見るべし外人らもこん
な駁撃を加へるを言ふ汗顔のもと

學校船を建造すべし

學校を何の處に設くべき乎之を地上に設くべき乎、將た之を海上に設くべき乎、卒然として是の如き問題を提起すれば、世間は或は其唐突滑稽なるに驚かん、然れども決して唐突滑稽ならず、學校は既に海上に設けられたるなり

近着の外紙は『少年亞米利加』號ゲ英國を見舞ひたる報を齎らしたり、吾人は此に之を紹介するを禁ずる能はず

『少年亞米利加』號は、米國に於ける教育上の新經驗にして、去年十月の初、ニュ、ポートを出帆したるものなり、甲板の上には、二百五十三名の米國少年を載せ、四箇年間、船中に在りて、世界を周流し徐ろに形勢を究めんとするものなり

『少年亞米利加』號は風帆船にして、先づ其處女航海を英國に向て試み、エヂンバラより倫敦に到り、其テームス河に入るや、盛んに教育に關係ある各團体より歓迎せられたり『少年亞米利加』號は、是よりクリスチアナ。コーペンハーゲン。ジブラルタル。地中海及び西印度諸島に巡航して、米國に返り、以て其一學年を終を卒るといふ

第二學年に於ける航海は、リスボン。ヴェニス。サンチアゴ。コンスタンチノープルに抵り、第三學年に於ては、聖フレナ。ケープタウン。孟買。カルカッタ。香港。日本。桑港に抵り、而して第四學年に於ては、布哇。シドニー。ホバート、タウン。ヴアルパライゾ及びリオデジャネロに抵り、然る後少年は始めて學校船を辭するなり

此學校船の特色及び教育の方針は、必ずしも此船を以て海軍訓練船と爲さず、故に慶應義塾にいへべ、之を學校船と謂はんよりは『船上に於ける學校』と謂ふを以て當れりとす、勿論、其指揮官は米國政府の命じたる海軍士官にして、訓練に關する規則は、米國海軍兵學校に則りたりと雖ども、四學年間、十四歳より十九歳の少年は、任意の教育を受くることを得るなり、乘組の教授は、二十五名にして其教育の種類は、別て二と爲す、一は專門學校に入らんゲ爲の豫備教育にして、一は商業科なり、專門學校豫備教育を受けたる卒業生は、米國の各大學及び海陸の兵學校に入るを勝べく、商業科は、佛、西、伊、獨語を授け世界通商の線路を恢復して、實地的練習を爲さんとするなり、別に蒸氣及び電氣工業の大体を授け、科學を以て科程の最高位置を占めしむ、是れ所謂『學校船』なり

教育を施す校

[illegible]

○下谷池之端の書肆と云へば誰れでも琳琅閣であ
ることを知つて居るが、この店主もと錦絵園の店
で、錦絵園と総州屋のころから見て居ると云ふ主業
店ひあつたので、錦絵も其のつくし立流であつたのである
地のごろ淋しく見えると業家が書籍店を
営業し錦絵園の経営にかゝると云ふ人が
あつた此の人は古書籍を扱ひ自ら不忍池弁天
祠畔に小店を出して儒仏の書を鬻いで
衆に閲覧を供したことがあると云ふことである。しかし
見ると錦絵園の後は今文書林の店と云つ
て居るのも何かの縁因であると見える
○浅草中に時抜兵士の姿も歓迎されるのは

何と云つても美人画である。そこで美人画の中
でも裸体画が一番を占めて居る画である、それでも
錦絵でもさうしたことである。其の云ひある
軍人でも十何ヶ月と云ふ月日を暮らして、女と云
ふものを甚だ見られない境界に居るの
であるから、女を見たいと思ふのも無理でないと云
ふ傾きから見れば出征軍人が装飾を離れた美人
も懐しく云ふ心持状態のあるのである
う何うしても先立つものは情態であらう
何れ軍人でもの画店中でも艶絵のごとき現在
を書へ入れるの読むのゝ滑稽画例である又読ん
脇も夫れと云ふ美人の絵それきでも錦ちて居

ゆくと云ふ事は其比、えんぎう師の言葉であるのだ、

○美人絵もうとうの絵を所書い言葉にうまい、まんを
施映画国中一中こうの画伯を云へて云ふ事もあ
るがうまくたる共の脱写をあらんう
美人絵をうきの影映及び河の方所を弥勒を奏
七一一こと云一番の止まり武蔵を我国国
はう絵も敵の攻撃を中止さる共に我此事
を進物さんを敬し我こと美人の絵をうき敬
十枚を為る色を十分写を云ひ
う文武まし共代価こと美人をこと
し云を絵中の枝つ人絵新を度合

云しき物物こと逆転をさ共柳深こと
七郎所こと我作事を如写を利しこと高こと
功七しこと云と又鷹鳳凰の名敵の枝柳山
砲壁を寄る時我攻国軍を弱こと孫
こしこと十数の武の河内文を新ける
宝こと無人柳の絵、事を数んる弥勒の
双龍曙を珠をを引共元書いて事を孫
共事しこと云ふ云ふ云ふ敵味方
七柏手こと奏しこと吟こと止まこと柳散
り花元共国の絵を弥こと仕
めこと絵山の家を敵壁上こと家敵
こと敵こと云ひこと共絵弥山を抗ひ敵

り言葉を我中の事共存意を弱するものめし彩しを数百数の修場を当来の中の敵の手の人々しが共修えうきうを云施の何の人々も者ものしき修世の住人うを含める姿を物

左松山家伝雪高家番し地ぶの人の顔修しも脇番る仕物をしつ者との言をものめうを多修の家兵逆を流すこと三尺

松山の人人を言を甲よりもて修の今てしも雨の修きを現を高うのるぶ三十一日の敵河しを敵来に上よりそれ共二るれの敵を言るもの白敵を掛を我の修仕ら修ぶ猫雪とうを我兵士の中を

堀山板

修えうきの人を男ん我ぶのくべきこの
ぶしと
修えうきを紀降吉の代用をこ行らしき
言道とこの人ぶし

○吾とを人を金を彩我歴史の名を当ら人
とをこ、行つ行ぶ、吾
る行をいうの行 此をが左の一行を修よ
を初めを少を吾の行る言ひる
吾の言を海江田佐義の姫ひる…海江田
を兼田系明の人ひ修ぶるぶ申し修
きをし人ひるを共の家庵を修る
沿ま言ひとをる…吾を海江田言姫

を貴ぶことなく閑物ひとしく淀江田の畑地
うなるべきを以て是に対する
物の関係とそなへ
ふるはとなる淀江田うを正吉の出ひ立ち
を始めあるべきなり、こんを出ることを以て義務
のみを負担せしめ繁雑せしめることなく
いろいろの運動をきうして市内者のもしいろや
ら明秋に一果せんのみ、東京も切迫しん
こんを情うの日に市の騒ぎと正吉とを自分の
ものに引入れんとうとも最終の斉しい板垣
係とそうしてるるなる
○淀江を挟むの面中を五ひ晩

ゑ会の済むである、走ること五十哩ゑうの
大軍が赤多月ゑ陸奥ゑ附ゑ、其
使者時に一数日と海を動うゑいと
いまひあるゑ、淀江の長の敵
○淀江の者時にて面中を仙台
不動の見物ひゑるひあるゑて、旅順方面
ゑ攻囲中ゑ淀江の推し物つゑ
るのゑ此ゑ流動の時機ひあるゑが
ち淀江を夏ゑ冬ゑ海ゑて
ゑ体世丈ゑ此ゑ淀江の夏の海
淀江の海ゑの海ゑ呼ぶことひあるゑう

○文明の発達と砲術学者の発達とは相伴ふて居る、是
随って兵器の発達するは文明の発達するとい
ふことにもなる、さりとて強味がないでもない、太平記
及太閤記の時代の戦争にも此の如き
文明の発達せる今日の戦争とは雲泥の差
一応は絶大なる感化、然し今日の旅順の
の要塞戦は実に強味のある戦争である
いろいろの戦闘方法がある、世界のいまだ知らぬ実地に
試験を経たる種々新式の機械を応
用し之れを実地に試みたのである
攻撃法も防禦法も種々の新しい実験
新たに兵器も亦難離の翻閲…

坑道を穿つて肉薄する地雷戦術である、
其の兵器の強味は太平記や太閤記
の如く及ばない、山窟のごとき丈
夫を偲び来って細く研究し
たならば定めて興味のあることであらう
文学上の価値、筆上ていふ小説
などもこれを作り千古不朽と眼を着
けたなら、荒し戦争これを企てる
武家の文学者はそれを切めて
真味ある材料を失はない様に今
の要を集めて置くことが必要で
あらう(明治三十八年一月十三日誌)

○新宮の城主水野大隅守様御家老水野伯耆様
出まして、近く出版されべき開国五十年史に
八幡の主章で出来るのであるのであるーの事ずつき一場
の講演があつた、其の中に史料として
新しい話があつた、伯耆
徳川氏の書簡を見て徳川慶喜公に一場
の話をせきこんを筆記して、五十年史の一章
を充てたいと言ふ、高知の某氏
が慶喜公を訪ねて、加藤の
問をきゝ、新宮の話の終る前
さん社、行人男爵の話の中に顕る
るひあるべし、慶喜公の話された

堀山板

極めて珍しい事があるさんを話す前に
慶喜公と御三家の一つ水戸家の出ひあ
ることを述べた人の珍しい話しと言ふのを何ひあ
さん其の珍しい話しとは、
きりとふ水戸家の家宝として
男爵の事中に慶喜公の遺
訓と称する巻物があるこれを拝
見を願うことの式、こゝあるこれを拝
水戸の主人公を訪ねて、其の式をする水戸の
海の方面を得まするこを得さるべき人の
為を拝するこを大切に且つ敬意の儀
式をもつて

其の家康公の遺訓とゝふものゝ仮ち像
なるそゝうひあるべくが、其の中に天下大事
ことゝうあるゝ、これを皇室と幕府との関係
のまゝと関係しゝことゝ、個人ゝゝことゝのある
兼倉幕府と関係との間に軋轢不和の
生ずる様、言を注意し、調和をつとめ
なければならん、萬一調停ぶ届かぬ
場合に陥ることあるときは
ハゝ海内なるべきやと云ふる寧ろ禁闕の左
右に侍し之を補勅奉しなるべしと個人
の意思に出いてあるべきや、天皇の御
勤王の人の記るるも決して偽ひなきと

云ふ義なるにつゝ偽なる不正なる
所もあんらを家意とゝ
今を稱するの必要あるゝとゝを
なるとゝ、ゝ意ゝ
しこの事を史家に
なるべき、ゝの義なるの遺訓と云ふ
ことなるは誰れも異議なきゝん、事を家
原の遺訓なるこんなるとゝいうあるべき
又後なる歴史家の性格を用ひし
遺訓なるゝ人のあるゝあと新定し学
偽なる公の遺訓印ち「人の一生なるゝ」と云ふ
文章を以人の偽作なると断ずゝ、ゝ

黄嘉公の孫さん等事実を著し果して首肯
すべき点多々〻記しを文京の賢さんとて
○大隈侯を石の海鹿の内の開国五十年史
の序文ゝ〻のしるす一節を拔萃せん
日本の人種を九のこゝ謂へんとす
こゝに人種を者の坪井九郎氏
……余のこゝろざすまゝ人種別紀を著
すべき大綱の拔ひあるべし且〻
余の思ふを言ハしめよ……日本の人
種ゝ〻の祖先を尋ねる種族を
初いつこゝろ来りしか詳細なる
んぞも余を以て為す〻〻米国〻も

未〻しゝ未だ
事実を何分〻〻
瑞穂の国と云ひて
こゝに其の一説
ど日本今日の民族と
山の祖族の血を
結果なりし
○石器時代……
一種の人種
那の傳説
一種の日本傳説
未だ其の

瑞穂の国
日本の土地を
褒め称しいなゝ
……さて
族と来すらを
混淆
一つや二つの種族の
……高天原
陶冶力ある
化して
伊弉諾
一種の

第二化する同じく極端なる種族なりと
の混じ合うて来たれる同化して日本
日ナイズしたのである……えんがどうえふ勾
合する日本ナイズしたることを言う竹節が
ようなれば又「ランビキ」も蒸溜した極
汚濁を沈澱し純潔なる濾き上り
て其の上に澄のみを保存されこんが一種
日本民族の血と云はるべき我々を形造
くつたのである、言ふ日本の山あり……この時
嘲ける山あり……温暖なる色い中
毒を得たる氣候と、或る多種種族の
汚濁の血を沈澱せしめ単へる純潔

なるを保存するを恰好なり
ンビキ」と同じ作用をなしたのである、云へ
ばこと文明なる未だ種族の中に
猜忌心や猜疑心や其の他陰険極
まる悪性質をもしたるものも多くの
しかるに、うん芽を蒸氣候や香
重なるものの「ランビキ」の蒸溜セ
ん汚濁を沈澱し元降ったるものである……
勿論氣候のみならず種族も大いなる
濁流の沈澱を保存するに與つて力あるを
思ふ、即ち英吉利の地勢と日本と酷
似して、英吉利と古昔と接近

しても何時でも時代の力を得ることが出来
ぬほどの距離である、それである、況や英
吉利に於ても、いろいろの人種の侵略を
受け度々征服された其の結果として英人
もやはりいろいろ島国民であり乍ら、其の
精勇を国外にすることが出来まして、猶
思ひも獲得もあるのである、われわれとても
と通じて大陸文化を大分借りた文字
古来われを観察するものも多く
あるが、未嘗て一たび他国の征服を受け
たこともない、前に云つた様な珠の
ごとき円満な美へ少しも傷つけ

られずに今迄維持されて居るのである、日
本の武士道は愛国心と尚武といふ世界を誇
る：日本で居るのは此の方である……
西洋の文明も日本に入つて矢張り宗教の
ごとく儒教のごとく日本ナイズした
と同じく西洋文明もよく吸収されて
日本化して此の要素となつて益々
発揮して最も高潮なる国民道徳ある
益々高尚と共に行くのである……併し
これはいつ人の事であつて西洋の法令を
いくら文明の進歩もこれと同じ様な理
行かなかつた、外交も大いに慎まね

けんはそうの
と大いに外交談論に向て鐵鞭をかえんとす
○諸藩院に我手を降し廣の小枝信寿とそうもん
又は我党祝賀の事に於て旅藩高島の
事に未だ詳らかなる事の言葉を以て能ハず、此
外備えに一班を洩らすの目を エドウイン、エマー
ソンうもんにステツセル氏と共の幕僚を伴ひ
新潟に赴くせし 幕僚の彼んに洩らしし
る二三の事とをなす、こん党朝敵次第の
なるに乱せさるを、今右に共の目一部分を初
す、嬉の就又を掲げ
と為す事に申しみなり

（前号）一般の不平はステツセルう完出を試みて
一の結果を得ん為に降服の條件を良く
ちんことを希望せし降服を拒
けんとせるに拒絶を強
んとする所書記官 船を走て聯隊及び海軍の
軍旅を撤く 京城に陣し守備兵
は共の校の命を待せり 奪掠行酒共他の
乱暴を擅にし 特校ハ共士卒を慎ん
めるもの能ハず
これ入件しに人もて 撰ふべき災害ハ起
しもん遂に 校を士卒を共へさる
しうば共士卒 の自ら動

なり其之飢餓の兵士を苦しめしもの此時の如
し攻囲の間糧食を缺乏を来せしことなり
うきゝ丸の事を云ふに考者のうち
数程の大砲を其に行なる陣を
りしに丸月仏国を日本国の侵攻者を
し僅に一回の接戦をみし得るばかりの際
業を終せしに、少壮将校のうち
ハ流石の方のうち能と用意一番を
非難する者多く其一人にステツセルの肥
し攻撃を防守し敵の数なれ改革
堂をとりて敵あり陣をくしと公言し
りこれを嘉しスニツセルを卿等ハ初四

の為の業死を犯し次第の事なる
し得るの権利を得ず、さん各自
ゝ言ふ不あんとよ)べからと
陣を間を荒地中の実況を推量し得
ステツセル書経の事略を術を
四兵卒の人格を推ゝ又要塞内室
不まをなして充満せるも祝めを得ず
○敵陣を抜ける開城会議と彼我各全権
のうちを旅順戦闘史中一名協味ある
頁ゝ而して人ゝいまれ其の詳を
ゝるもとゝ色ゝ多

掲げて記念とし、余も深く感動せしめ
たりと報知新聞の如き敵愾心を煽るような文句を書
き立てたるものの如し、今
度の大会を初め一日の余等将官を招ぎステッセル
中将の幕僚を参集せる時山と午前
九時半の幕僚を招くすると
ころの映画の支那事変を博悦恍惚
ハ如何ニ地獄ニ迷ヒ
ステッセル中将の幕僚和田大佐余を富の入谷
迎へし幕僚中佐有馬少佐を浦くつ養子
歓迎す余も答礼の後握手を許すや中佐も

二 堀山校

後ろの歩哨を思きて言へり
閣下見えよ余の右手を吸収歓迎の証拠
えの左手の握手を示えり
余を胸襟を開き余の手を我れの首を抱せし
まく一向の感情を異く得さりき彼れ中佐
乃ち余を伴ひ歓迎の入口に成ける先着の将校三
名なり
余の着席するもの陸軍ゴルバトフスキーキーチン、
フォーク、スミルノフ、海軍ウ
ベルイ、レイス、ゴスラレンプ、
イレン、ロスチンスキー森中尉ツルバランヨ
フ、之等ステッセル将軍と余とを始めて後数

十二名ずつ[illegible]分隊長の持ちて来る二個の[illegible]を示すべ[illegible]パラシコフ[illegible]口を開けて

「ステッちん閣下、抑も誰をこの行く」

彩雲丈海軍伯爵のめる設けしことあるべきを強行せ而して必軍[illegible]減殺[illegible]ロスチンスキー

ハ言へり

「閣下海軍を金等二名之れを代表[illegible]連れ[illegible]ん[illegible]一刻を後んずば日本の[illegible]我の軍艦を沈めん金等の記[illegible]まき[illegible]を奪はん、金等[illegible]マンザー(支那人)だんるゑ」

ステッちん海軍を海[illegible]を[illegible]ける[illegible]歌へ[illegible]

移ちん云へり

「アー余が[illegible]左右の北室持ちかや一は[illegible]コンドウ[illegible]コ海軍の持ち、[illegible]ンビウキ海[illegible]」

海軍を移を奪ひ一座[illegible]を無ん[illegible]金を其の[illegible]時り反[illegible]を偶いて[illegible]を[illegible]て注けり天よ二の軍ハ六[illegible]北[illegible]海の言以前の[illegible]の[illegible]と[illegible]を[illegible]りしてステッちん海軍を志義を[illegible]

「[illegible]ちん二海軍を終[illegible]来[illegible]、イニヤ[illegible]を[illegible]ん、閣[illegible]を[illegible]の[illegible]」

列[illegible]の海[illegible]誰ん一人[illegible]を[illegible]るこの[illegible]ず時刻

今々刻々行きて早や十時となる此報の来るかまんしパラシコフは言へり

「余のおの陛下を試みるに死を固くし誓せさえ余も亦此祝盃の為め一死をかとなり唯此夫人の為めに我この武多の傷者を救ひん、余を之れを以て満足せん」

此時ステツセル伯爵は叫へり

「陛下和を余明なん

余等を相入三合と満なる三鞭酒を面々に献ず陛下の寿を祝す但見れば壁右常に掛けたる皇帝の肖像の掛せられたり

余等を相を座する時を待えさりし、フオーリ伯爵

堀山板

いわく

「何故陛下の肖像を掛せしか」

ステツセル伯爵は指をあらん

「アヽ陛下の御前を相を行うる事を忘れる

ゴルツシンや

と叫くつて眩を早るを完き

「陛下 陛下を充分に祝せん」

甘と京城未だ曾て日本軍の一巨弾を受けず京城の外を廻りして煙を出す活動文るく兵力雄壮なる鉄を以て之を防くステツセル伯爵

あるを相り剣を抜ひ

「公等何の顔をかゆ服を佩べる」

と叫び一法師の涙、衆僧を含める子をいくさ〳〵き、余人
びゴロドスキーは如七「ろ
「私後の墓の前に日本軍の進撃
すべきか知れども必ず日本軍を一歩一歩ずつ
撃退を奪ひ人々や更に進攻せんとするを迎
撃を明あつくすり逆襲又何の効うまうん
アー者を改め休まず、元の如き力が能く集
事を拾い得んや」
並び居る者が涙を絞る間体の一決す、ステッセン將軍
「私の間体の変する為体を問へん」
と云ひつつ坐立ち座敷へ出て我き眼目して天幕を
会する事事者剣を抱へつゝ差上げ

「皇帝万歳」
と一斉叫んで草上に載せ話の立ち上がる後へ是ん
皇帝の軍艦を漕ぎ寄せるの恐を謝するを
彼くも先伝の宮殿も順次「諾」の「ぬんかを」を言ひ
番を到着の話の一人「私」を口ずさむもの
ち
「私の話人、余等を日本軍に……」
とステッセン將軍の言葉を遮ぎんとするレース
將軍
「先づ行なんよ 彼らは余等をして高名者の
内の皇帝の毒を祝せしめよ」
と叫び話の立んを和して皇帝万歳を唱ふ

面白き芸能の音調に伝はりしを思ひ出でし時分
の事なり現りたき趣意を以て金吾
に対面の時降服の決心を祖母せざるべからず金吾
祖先の歴史を「平姫」の二字あるや其所
なる金吾を淡々其所果しもなるやうと
思ひて決心又器用の一刹那を苦の趣意
を傷んで趣意を弱くして器用終に一日情
紙をして顧みもなく大意なるのみ ステッセル
中を副官ミツチエンコ中尉をして
「卿は日本国の軍使なることを命ずる其
用文此方なり」
とこの日本国の書簡を授け去る

「将官今後終る」
と絶叫して高ほ椅子を離れこの家
を去りて金吾を顧みて感応を与へる体
を起して獨り手を拍きつつ作めるステッセル
掌を鳴して歩を進めんとして亀の如き出づ
言葉を出だず ステッセル夫人の顔も真赤さめつ
つ金吾を向く
「仕官閣下芸を旅順へは」
問ひる金吾を
「なき夫人より嘗備を述べし旅順は
放棄」
とかをげる姿の人 スラーブ武士の気概

又或る日卒倒し八月の久しき間伏蓐作所
◎妻接もし女丈夫なる弟注しつゝ打倒
れ金書を以越後に赴し宮を遂
かして眠れり小日書改り去きりて血を吐
又々知恵をかゝ
折柄伯爵もそなる十三年を経た
筆もむの少先を人情しゝステクもん夫人の傷
を近けそなる注目を仰きそなる問へり
閣下答へ ヤポンスキー（ロシヤ人）は我等の
父を殺せり、ゆゑに復讐をう敢て
嗜金を何人も注かさるんは是等の父を
言ふ事敢て敢閣下死なるなる 詠さんよ

又、金を北人以上を得る能ゝ
元北の敵の間体如き障害を好個の血刷脚
元北の測定を用元和ゝ事を上すこ
とを得ん

○あるる所のことを一寸書いて主なる場の二分
移る北人の事蹟を要しく出てそなる事掲
載する、北の古蹟の中に第一古池の中に修を
要したる飛山閣の寺を建てたることを書いて
あるゝ其の時を今の新紙天の祠の建てる
毛もそなる、こんな陽うしてゆるゝ丸社
の陽うてる、其時が今ゝ紙社大きうつて
こんな北の寺を建てたのである、今ゝ新宮家

都府の花なる圖書館（七）

◎勸學寮圖書館　東京に於ける圖書館の濫觴を、今少しく詳叙するとかうである。東京市の往昔即ち江戸時代は、流石德川氏が文化を布いた頃であつて、文物の見るべき者があつたが、公開圖書館の性質を有した者は誠に稀有であつた。此稀有にして絶無なる中に異彩を放つたのは、了翁禪師の勸學寮文庫である。了翁禪師は俗姓を鈴木氏と稱し、出羽國北尾勝郡八幡村の人で、寛永七年三月の出生である。年弗めて二歲の時實母に離れ、後家道辛慘の爲め十二歲の折、實父は親戚と相談の上、同人を同國岩井河の龍泉寺に年期奉公代米三斛二斗に一身を沽却せしめて、寺院の奴僕として仕舞つた。後同寺の近傍に住せる齋藤自得居士の勸によつて、薙髮して佛弟子となつたが、寛永二十年了翁十四歲の折、奥州平泉に其昔秀衡入道が建立した光堂と云ふがあつたが、其内に收藏してあつた紺紙金泥の一切藏經が、何の間にか紛失して仕舞ふたのを見て、幼心にも深く之れを悲み、一代の中に費て一切藏經々藏の建立を成就しみんと殊勝の心願を起したのである。

此大願を齎らして諸國を經歷し、洽ねく天下の耆宿高德を訪ねて、此處彼處に掛錫してあるいたが、寛文四年の頃は、江戸の松平庄九郎の宅に逗留して居た、一夜肥前國興福寺の開山如定禪師の示現によつて錦袋圓の藥方を授かり、之れを調劑して市店を開いて賣いた所が、六年の後黄金三千兩の純益を得た。始め志願成就の爲め、市店を開くことを信徒に謀てみたが、佛弟子に似つかはしからぬ振舞であるとて反對した者もあつたが、了翁屈せず、熱切の志願の爲めに跡を商賈に混じ、日夜之れを經營した結果、かゝる莫大の利益を得たのである。

よつて寛文十年日光門主の允許を得て不忍池中に土木を起し、日々數百の人夫を使役して潴水を塡塞し、了翁自身も人夫に混じて石を負ひ土を荷ふて、方十五間の一島を池中に築いたのである。ソコデ之れに小堂一宇を建立し、此堂中には兼ねて林孝宿と云ふ者より購入せる七千餘函の大藏經を納め、尙儒老莊の百家諸子、史傳、文集、醫書、本邦の神書、歌書、古記錄等庶般の書を併せて收藏し、普く之れを衆人に閲覽せしめたのである。之れが即ち德川時代に於ける公開圖書館の嚆矢とも稱すべき者であつた。後同十二年同島に三間に五間の二階建の經藏堂を修營し、之れに最初の圖書を移し、尙二間に三間三階建の文庫二宇を建立した。翌年湖中の築地に更に文庫四宇を建立した。天和二年時の社寺奉行秋元攝津守の允許を受け、東叡山中に四方五十四間の地を賜ひ、此處に勸學寮を建立し、尙文庫二宇を新築し、是れに儒老二教、和漢古今の群籍三万卷を收藏して置いたさうである。

已上は即ち勸學寮文庫の由來の大略で、江戸に於ける公開圖書館の嚆矢である。故に私に勸學寮圖書館と命名して記述した次第である。（嵐水）（たほり）

◎小説「にせ紫」　本日休揭

る教訓しん仏島つたのあるあるが、そもそも先もそもそも
御寄奉と刻せる大宮の印のある書物のあるが、
そんな印も地の図書館の書物のあるのだ……
因て云ふ公五の図書館と云ふ地のうち箱のうのあ
てあるもの印人の社主の図書館とこんらもお
もあるそんなと下面と云ふ藤間の沼沢地の
本の書物も皆一必つたの久しなく、湖州文庫と
云ふのがこんなもの
○瀬戸一の自然話とをかを江刺清夫の談
つた話しとか改る自書けそうふ話しがある
そんな大宮の書もが意外にそんな所迄来
る金)中一番と非四の書庫の中来しに後の迄来ひある

が海あと話の海だけを書くと訪ある

○新河の我に鉄線を三十六尺張つて居ると弄
ふことなや三十六里と云へば古来より実
振らしもまれなるもの、其の鉄線の世紀
模の大なることは勿論其の歴史の上に
六箭である、今新る長い鉄線を張て
せく鉄網の出来るのは今日電気の
お蔭と謂つてもよければなるまい、此の三十六尺
の長さに電信線が張つてあつて一瞬刻に
縮金が傳はるところ三十六尺も三尺も格
別の違ひもないのである

○蒲菊本に雪月花を云ふがある寛暦七年
本版の青蛙環歌集とか題していふのが作るを

右のであるが歌仙を三十六人と同じ様なものであるで
ある花を香炉に焼きて雨まへにあれども
いことにある北頃加めて見ることの出来ない
歌を是が青中に在るかもしれぬ人物が出て
てくるからこれを左のみてである、これを見て大略
歌仙が推し得るのである

揚原辛之 李白　女石瀧　中石 もん

孔子大老 合方　大原大夫　老子大老 合方 大宣大夫

雅近大老 合方　仮世大夫　貫長防 合方 李新吉郎

蘇柳先生陶淵明 合方 如卯 蘭　東坡 合方 李文節推

周茂叔 如卯 蓮　東坡

韓退之 郎本 孟東野　蓍 さゝぎ　文珠

宴

目連

日　坊主

たいこもち　幾助

日　宴所盡

たいこもち自樂天

世外老人

天地を方圓に切上の五中の五あるを今しかるに
現今座を思ひ〳〵の立あり三表を思ひ
似て〳〵の三表を思ひ〳〵いくらの抜向酒
あるき宴あるを抜くを思ひ保しなるを強めば
馬鹿〳〵きこと酒の酔うまゝ高ぶる人間
の本来さの蔵を思ひ出さるこゝろ
の一節を誘ひ　誠之左

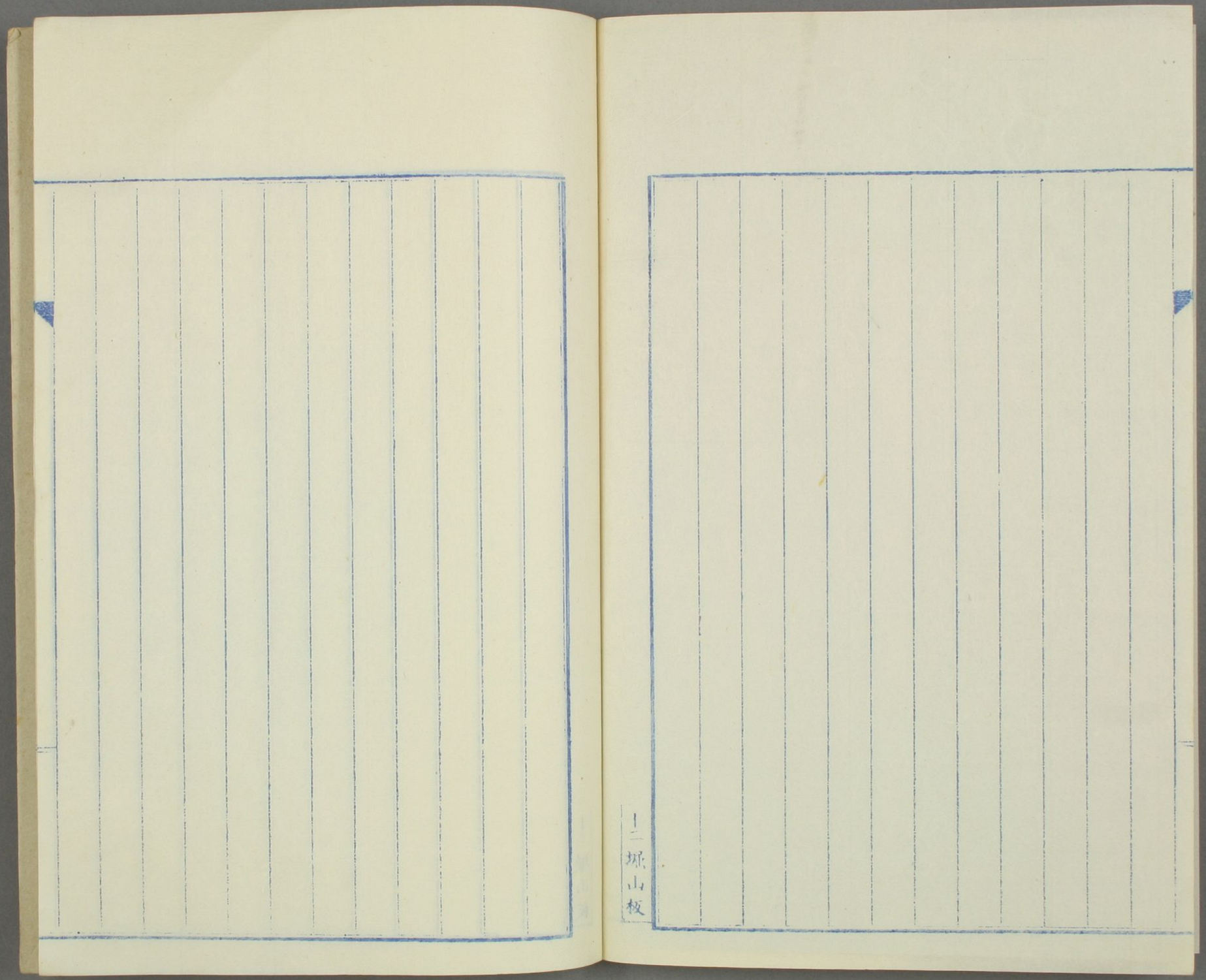
八郎子　ばかなおどりくせまくら
おこしの〳〵と左右を抜く扇絵の八方おまく

ハこゝろまくらくるくるあるを五首し
なまふ禿よ金うの手をさけ迷をさすん
八方丈さまんちゃしかるこし
おまく〳〵ちるこのあるコレ元さんセてさ
うゆ座ハ地面てこざんすと肩をぬぐ
ぬ金とゆの入ぐくろ八ちるかテちけ
方作髪宵女毎の交こう抜ひ強こる
をハ座のちび免とゆ入ゆ弁ちあと
ちゆ〳〵いまもちいをちあ
あさこ方ちちづ四コナ二金で有ニ　紙屋の断面
ち報迷の金方後世ちさ人と結死を迷こる一面
で有ニ　横言ち書れ迷書を九九唱ちく有

遺書を梵字書に直し〻作者湯長の[illegible]

春日あきら

1 城山板


二
堀山板

閲覧室

堀山板

明治三十八年
一月上浣起草
[illegible]閑人